詩誌84 – 2014.11

収録作品

ペリキュール

ぼくは祝福ができない

走れ、

うちはヒーロー

カラフル

しぐなるになるまで

三態

かれは

學修さんの絵はがき

Copyright
著作権はそれぞれの詩の著者（巻末に呈示）に帰属します。

ペリキュール

いま
誰かがきみのことを覚えているとして
きみは歌わないし笑わない、踊らない
客電のついたダンスフロアには
くだけちった星々のかけら

夜の音をきくたび
忘れることがあまりに多すぎる
３３回転の季節
のせられた胸はいたむ

皮肉とおもうなよ

ぼくはも一度きみと酒でものみたかった
胡散臭いアルコールとおざなりなつまみ
面倒くさそうに光るミラーボールの下
くだらない大人に聞こえる場所で
馬鹿話
くりかえしたかった

遠くへ行ったのか
旅にでも出たのか
ともあれきみからの便りは知れない
誰もがきみを愛していたと嘯く
自己愛と自意識のミックステープは
まわる、まわる
ほどけてつながる

そりゃぼくだってそうだ

いま
誰かがきみのことを覚えているとして
きみは歌わないし笑わない、踊らない
客電のついたダンスフロアには
くだけちった星々のかけら

夜の音をきけよ
きみがいないあの街をおもうよ
３３回転の満月にも似た
ターンテーブルはまわる
誰のおもいものせないままで
ぼくの嘘も終わる

ぼくは祝福ができない

みんながなにかに酔っているとき
途端にしらけてしまうのはどうしてだろう
それが喜びでも悲しみでも
ぼくのなかへはお邪魔してくれない
六月の太陽みたいなやつ
うっぜえな
きらきらしやがって
ぼくは
十一月の朝のつめたさで
燃えていたい

あんなに遠いとおもっていた場所が
歩いて七分くらいだったりする
そんときの「苛立ちを失笑にまぶしたあのかんじ」とか
味のないふりかけでご飯食べさせられてるような
そういう種類のゆううつ
あんたが
大切にしてるものをぶっ壊したい、というより
あんたが大嫌いなものをぶっ壊れるくらい愛したい
紀元前まで遡って
殺したい

きっと百人の怒れる小人たちが
このでっかい頭んなかに住んでいて
右端から順番に数字を叫ばせる
七十三あたりでそいつは黙りこむ
そして
ぼくは
しらけてしまう

一個の喜びと一個の悲しみと
一個の好意と一個の憎悪を
足したところでニコニコできるわけじゃないから
一個の喜びと一個の悲しみと一個の好意と一個の憎悪がいまのぼくを形づくっています
ぼく、という現象は結局のところ
一個の喜びと一個の悲しみと一個の好意と一個の憎悪によって名づけられた
百七十八センチの可燃ゴミにすぎないのです

三月の木漏れ日みたいなやつと酒を飲んだ
そいつより先に酔いつぶれてねむってしまった
真っ暗な記憶の夜に
小人たちだけが律儀に点呼をとりつづけていた
たぶん百までたどりついたので
もうこれ以上しらける必要はなかった
相変わらず
ぼくは
祝福ができない

ぼくは
祝福が
できない

走れ、

夢なんて無理して叶えなくていい
ほんとうの愛も
ほんとうの幸せも
曖昧で形のないもののために
頑張る必要なんてまったくない

代替手段の代替手段

将来は暗くていいし
未来は閉ざされていていい
なにもかもを満たすなんてこと
出来るわけないから
無理なら無理と諦めていい

これが駄目ならあれのために
あれが駄目ならそれのために
代わりを見つけて当てがって
言い聞かせて説き伏せて
自分自身を納得させる

代替手段の代替手段

そうして集まった煌めきの
なんて小さなことだろう
こんなもののために
こんな小さなもののために
頑張ったというのだろうか

息を殺してなりを潜めて
嘘で騙して言いくるめて
目を閉じ耳を塞いで
一心不乱に走った末路が
こんな成果でこんな結果

いつの日か報われるのだろうか
原石が宝石の輝きを放ち
苦労が徒労ではなくて
なにもかも無駄ではなくて
正しかったと喜べるのだろうか

代替手段の代替手段

代替手段の代替手段

大丈夫
心配ない
逃げ続けていていい
後ろ向きでいていい
まったく問題ない

代替手段の
そのまた代替手段でいい
ただ走ってさえいれば
いつかきっと必ず絶対に
花は咲くのだから

うちはヒーロー

上から目線で世界を慈しむための愛らしさ
ハピネスチャージプリキュア
二時間サスペンスの文脈で生きてる老婆は
光の速さでチャンネルを変えた

勉強はしなかったんじゃない
できなかったんだ
ヤンキーとキモヲタしかいない底辺高校で
人並みの青春は首を吊って絶命
やり場のないきらきら、わくわく、うっとり
やり場のないいらいら、もやもや、うんざり

みんな死ね、って言えちゃうガキ臭さがうちらの美徳
昭和生まれ新世紀育ち
戦後生まれは大体友達

側溝にもぐりこんで
綺麗なものの下卑た部分を見上げながら見下して安らぐ
テレビジョンはいつだって正しいことしか言わないので
うちら何度でも踏みにじられて土に還る

空気は読まなかったんじゃない
読めなかったんだ
「普通これくらいわかるでしょ」の圧倒的正しさに心臓をかち割られ続けて
リストカットすら出来ずに絶命

ただしくなろうとしてなれなくて
いやなやつらに踏みにじられて
普通に抵抗したら死んじゃったから

あなた今日からはい犯罪者ねって
いじめっこの決めた遊びのルール的理不尽な世界観

いつだって正しい名取裕子
いつだって正しい船越英一郎
いつだって正しい山村紅葉
いつだって正しい名探偵、名刑事、正義のヒロインヒーロー

みんな死ね

「正」の字はただしいうちらの礫になった姿だ
誰が一番面白いポーズで死ねるか競争しようね
「正」の字はただしいうちらの数字に還ったなきがら
笑ってはいけない処刑場で噛み殺された笑いと一緒にきみの心に埋めてね

醜く豊かに腐りながら
栄養になってあげる
きみの苦しみも悲しみも悪意も全部
栄養に変えてみせる

うちはヒーロー
詩人という名の
昭和生まれ新世紀育ち
苦しみ嘆くきみのともだち

カラフル

桃色のハムを食べる
茶色いうんこが出る
緑の野菜食べる
茶色いうんこが出る
真っ赤なりんごかじる
茶色いうんこが出る

色とりどりのいろいろなもの食べて
色とりどりのいろいろなもの吸収
そうやっていつかわたしもそのうちカラフルになれるはずだって信じてた
でも

いつまでたっても身につかない
きれいな色に染まれない
絵の具で汚れた筆を洗う
バケツみたく濁ってゆく

どんなにきれいな歌をきいても
わたしの書く詩はどどめ色
桃色の片想いしちゃっても
ふたりの絆は無色透明

やだなあ
このまま死んだら
わたし最初からこの世におらんかったんと変わらんがん

人は二回死ぬってよく言うよね
一度めは肉体が滅んだとき
二度めは人に忘れられたとき

一度めの死を迎えぬまま
二度めの死を迎えることだってあるよね

土に還るのは怖くない
みんなそうやって生まれて死ぬんだ
忘れられるのも仕方ない
何もかも覚えていたら残された人達は気が狂う
いつか土に還るまで
いつか土に還るまで
それまでの意識
それまでの感情

いつか土に還るまで
なにもやりとげないでただただ遊ぼう
いつか土に還るまで
明日出来ることは今日しない
いつか土に還るまで
今すぐはちょっと急じゃねって話
いつか土に還るまで
だって今月金欠なんだもん
いつか土に還るまで
来週から本気出すからいやまじで
いつか土に還るまで
いつか土に還るまで

いつかって
いつだよ

生きることを先送りし続けて
生活の濃度が薄まってゆく
絶妙に古臭い今でしょをせせら笑う事だけは一丁前で
ふと気付けば三十年も生きてしまいました

いつか土に還るまで
胸張ってただいまを言えるまで
今はまだ待って
まだ待ってて

君に贈るおやすみがまだ見つからないんだ
だからもう少しだけ遊ぼう
今だけ
この夜だけは
こうしていよう。

しぐなるになるまで

ひこう機のいない空に
警笛が鳴り
かかとたちの端がそろえば
雑踏や、校舎のわきの
どの地形図にもむすばれる湾岸線は
あばら骨、低い花も、育ちかけに
風に削がれてある
岬
伏せた目にそれぞれの視る
くらい水
その畝間に
そっと指をはなしても、かつて
みなかみより流した
すべての笹舟が浮かばないのだ、と思う
そのようなわたしならば
もはや
浸水する
打ち棄てられた灯台のように
しずかにしぐなるを待ちなさい
そのしぐなるもしぐなるを待ちなさい

よゆうですか、ゆうよですか
街頭の気圏はしめった電信にみちて
まだ約束のあったおまえの
口角にまで結露する
なにひとつ、ないものがたりを
ものがたりたくないのに
黒ずんだハツ
消臭剤に飲む酒の
あふれたふりをしてぬぐう
昨日や明日から
レバーの肌に
消せない血の気が浮腫んできていて

よゆうですか、ゆうよですか
だしぬけに頭上を電車が通過する
その音も
しぐなるとなり、うみあふれ
なにひとつ、ものがたりはせず

朝焼けちかく、ターミナル駅のホームで
負の会計はあわないままだ
紙幣が謎の消失を見せ、端数を切って忘れてゆく
川下に葉の流れるように
あしばやになる
つぎの約束が口をついてでないとき
おまえが一縷の姿になる

よゆうではなく、ゆうよではなく
ありったけの
空がおのおのに配給されて

なにが合図かわかっちゃったら
それが、合図かもね。
のどぶえも汽笛も
もとはからっぽの管だから、風、色々にとおすだけ
それで、ヒトが
徒競走したり、とびこんだり、するだけ
でも。
あんただって震えてる
末端ひえてる。かじかみか火照りかわかんなくても
指先がもうすぐ冬だってわかる
末端とか端末とかいっしょくたなのかな
こうしてただあることも
こうしてただあれなくなるのも、飛沫して
うゆよ、とかでいいよ。
なにそれ？
しらない。
きっとこれも、しぐなるでしかないもの
寒いね。指切ってつくった笹舟なんて
ゴミみたいに浮かんできてこれしかないだけ

三態

Ⅲ

ひし形の口が明るい中空を向いたまま、ゆるやかに開きはじめた。受けるべきふくらみはいまだあらわになってはいないはずなのに、黒々とひかる瞳の底には早くもさざ波がたっている——若葉の影がうごめく。かぐろいまだらがぼんやりとしたうねりとなって、スカートや肌をもやもやと揉む。息だ。若葉のむこうで燃えている太陽の息の切れはし。手足も目鼻も性器も切り落とされた筒めいた切れはしとして、わたくしは伯母のちいさな家までのほそ道を移動してゆく。

Ⅱ

（おそらく　どの窓からでも
簡単に飛べてしまう
午前も午後も
白いひかりにぬぐわれてしまった
ひなげしの畑の上を
はじけたり　かたまったり
まわったりしながら　火薬のように飛ぶ
血まみれの丸太ン棒になったあと
にんげんや魚を
いかに愛すればいいのか
なやみながら）

Ⅰ

わたくしは剥がれる、父の血を嘗める力で、わたくしの肉は空気の仮面から剥がれ落ちる。季節のさらなる分裂を包んで、濡れたすりばちの底へ、ゆるやかな螺旋を描きながら出発するしかないのだ。そして出発の過程の内にしか、祝福の石が伏在しないことを回想する。おはよう、おはよう、おはよう。わたくしたちの口にする野菜や肉がサンプルに過ぎないならば、わたくしの骨に絡む魂の脱け殻もまたサンプルに過ぎない、ほろ苦さのかたまりの核に宙吊りにされて、さあわたくしたちは生まれ変わろう、生殖はあらかじめ剥奪されたが、転生の権利だけは法典に
刻まれている、この美しい朝の
廊下へ。

かれは

祝福とおめでとうの違いが三文字分でも分からなくて
葉の色が変わる季節
落ち葉を靴の下に踏む
森林のなかの一樹になりたかったですか？
山のなかに立っていたかったですか？
名前を知らない形の葉が濁った赤に変化する
乾燥した空気で地面に落ちてぱりぱりになった葉を
しゃかりと音を立てて踏みつけ歩く
次のしゃかりの葉まで道を選びながら
家へ帰る
冬ってこわいですか

名前って知らないうちに名付けられてしまう
から
この街路樹の名前にはこの樹は関与していない
私は、私の所為じゃないです
の
根拠みたいで可笑しいとおもう
　否、おかしいと思う
内心は、可笑しいとおもう
何事も笑うしかないです

ねえ
ヴィーニョの門のひとつ手前を知っている？
国語ではなく言葉で
ギオロンって云ってみてよ、

頁の活字ではなく、
あなたの口から聞きたかった。
喋ってよ！
あなたが、あなたの、
その唇のかたちで知りたかった
その声でこの世の光を見たかった

――愛を語るハイネのような私の想う彼は詩人なんです

常緑樹の葉を毟り盗って押し葉にする
百科事典にハトロン紙で挟む
ねえ、
きみからの教唆しか慾しくなかった
冬ってこわいですか

學修さんの絵はがき

年末近く葉書の整理をしていたら束になってあふれる
學修さんからの青インキの絵はがき
學修とは祖父の名前
脳溢血のため右手が使えなくなり左手で文字を書く練習をしたのは
私の物心つく前で
亡くなったのは
私が高校時代を終えた翌日でした
卒業式に出席出来るように待っていてくれたのだと勝手に思っている

「いずみちゃん
　３歳のお誕生日おめでとう
　いいこにしているのですよ」

万年筆の青インキでそう書いてある

危篤の祖父の手を握ると
もう誰のかおも判らなくなっていた筈なのに
祖父は涙を流した
私だと判ったのか
それを知るすべはもう無いけれど

祖父がリハビリのために
日記をつけていたことを思い出し
急いで祖母に電話をして
開いた日記帖はやはり万年筆の青インキ
世界情勢や文藝誌からの思索ばかり書き付けられた
そのなかに挟まれて一行

いずみが７歩あるいた

それから三十年近く経ち
血と罪と嘘を背負って生きているけれども

「いずみが7歩あるいた」

祖父は日記にそう書いたことを
護られていたのだと知る

祖父は私を一度も叱らなかった
どんな叱咤よりも強く胸を打つ途方もない寛さはときに
善く生きたいと願う気持ちを授けてくれる

學を修めた人生
沢山の絵はがきをありがとう
たくさんの

次に孫娘に生まれることがあったら
抱っこしてください

1
9
8
4

参加詩人

ペリキュール　ぼくは祝福ができない
chori

走れ、
秋山真琴

うちはヒーロー　カラフル
三原千尋

しぐなるになるまで
小林レント

三態
久谷雉

かれは　學修さんの絵はがき
泉由良

詩誌 84 – 2014.11 秋号

web
http://poets1984.tumblr.com/

twitter @poets_1984
https://twitter.com/poets_1984

編集　泉由良： hakuchusha07@gmail.com

「84」は、1984年４月～1985年３月に生まれた詩人が2014年に制作する同人詩誌です。